基礎看護学実習の実習方法変更における評価
—看護過程の習得状況を分析して—

森　本　美　佐

はじめに

本学は２年課程の短期大学であるため、基礎看護学実習は受け持ち患者に対して看護過程を展開することを通して、看護に必要な知識・技術・態度を習得することをねらいとしている。また、基礎看護学実習３単位のうち、１単位は老年看護学実習に含ませているため、従来から１週間の臨地実習を１年次後期に行い、学内で振り返りをするという方法をとってきた。実質的には病院実習での１週間で、看護上の問題から計画立案まで指導者･教員から指導を受けながら考え、後期テスト期間を挟んだ後記録の提出をさせ、それを基に後日再度指導をする方法であった。しかしながら、本学の学生は准看護師の資格があるとはいえ高等学校衛生看護科を卒業してすぐ入学している者が多く、短期大学に入学してから初めての実習で、コミュニケーションもままならない状態の学生が多かった。そのような学生に１週間という短い期間で計画立案までの課題はかなり難しく、それどころか対象の状態を既習の知識と関連づけて理解させることも至難の業であった。実習の数日後には後期試験も控えていることもあり、基礎看護学実習は学生にとって大きなストレスとなり、看護過程は苦手という意識を植え付けてしまうこともあった。

実習期日は、実習病院が数ヵ所の病院にわたっているためそろえなければならずに１年次後期１月と定められていたが、平成15年度より実習病院の変更もあり後期試験終了後の２月に実施できることとなった。そこで、今までの問題を改善すべく、実習内容・方法等の検討を重ねた。基礎看護学実習は最初に体験する臨地実習であるからこそ、看護の対象である人間理解を深めていくことができるような実習方法にしたいと考え改善を試みた。その改善した実習内容と評価について報告する。

Ⅰ．改善した基礎看護学実習の方法

１．目的・目標

基礎看護学実習の構成は、従来と同様に３単位のうち１単位を老年看護学実習に含ませ、実質は２単位の履修とした。基礎看護学実習までの授業の概要は、基礎看護学概論・基礎看護学方法論Ⅰ（基礎看護技術）は履修済みで、基礎看護学方法論Ⅱ（看護過程の展開）は履修途中で講義の中では２事例のペーパーシミュレーションを行っていた。

基礎看護学実習は、看護の対象である人間と直接的にかかわり、基本的ニードへの援助を通して看護の必要性を理解し、各看護学に応用する能力を養う学習である。２年課程の短期大学であるため、大き

なねらいの変更はできないが、看護の対象である人間が生活をしている場に初めて直接かかわることを考慮し、看護の対象である人間とはどういう存在であるのか、看護とは何なのかを考えていける、つまり、「人間」と「看護」の基礎的な理解ができるように表１に示す目的・目標を設定した。

表１．基礎看護学実習の目的・目標

目的	看護の対象である人間を理解し、看護を展開する能力を養う。
目標	１）対象とのよい関係を成立・発展させることができる。 ①対象の行動や態度・表情に関心を向け、傾聴することができる。 ②対象及び対象を取り巻く人々との効果的なコミュニケーションができる。 ２）日常生活の援助を通して対象を理解することができる。 ①対象を取り巻く生活環境の理解ができる。 ②対象の状態を正確に観察し、対象に適した援助を考えることができる。 ③行った援助を対象の反応を確認しながら振り返り、次の援助に役立てることができる。 ３）対象を全人的に捉えることができる。 ①看護するために必要な情報が収集できる。 ②対象の全体像から対象の特性が把握できる。 ４）対象の看護上の問題を明確にし、その人の持てる力が最大限に活用できるよう看護の方向性を導き出すことができる。 ５）対象に必要な看護を、優先度をつけて計画することができる。 ①対象の生命力の消耗を最小限にするために目標を設定し、その優先度を考えることができる。 ②目標を達成するために具体的な方法が立案できる。 ６）対象のニーズの充足や自立の程度から対象の反応を確認し、自己の行った看護を的確に評価考察することができる。 ７）適切な記録・報告ができる。

２．展開方法

基礎看護学実習は２単位２週間の実習としている。内、最初の１週間を病院実習、残りの１週間を学内実習としている。実習病棟は、成人老年系の病棟を選定し、経過別では主に、慢性期、回復期にある患者を受け持ち実習する。受け持ち患者の条件はこの他に、本学入学後初めての実習であることを考慮し、日常生活の援助を必要とし看護上の問題が複雑でないコミュニケーションをとり易い患者を選択してもらっている。指導体制は、３病院12箇所の病棟に、３～４名の学生が実習する。１教員１病棟を担当し、学生が患者との良い関係を成立できるよう配慮している。指導者との役割分担は、指導者は主にケア面での指導を、教員は日々のケアや記録から学生がこの患者にとって必要なことは何なのかを考えていけるよう支援している。毎日30分間のカンファレンスを行い、実施した援助は患者にとって適切で

あったか、適切でなかった場合はなぜなのか等を考えさせ、既習の知識と実践の統合を図れるよう指導者及び教員がアドバイスをする。病院実習最終日には病棟で反省会を行う。

病棟での１週間は、患者の全体像が捉えられるようケアを通して情報を得ていく。記録は、毎日実施した援助内容の中から学生が優先度の高いと考える３項目に対して行動記録を記入し、日々の観察記録用紙（フローチャート）、プロセスレコードも毎日記入させた。それを元に学内の１週間では、担当教員の指導を受け情報をアセスメントし、看護上の問題・看護の方向性を考え、看護計画立案まで紙面上に展開する。従来の方法との違いは、病棟での１週間では計画立案までの展開をさせるのではなく、ケアを通して一人の患者を観ていくことに重点をおき、学内の１週間で展開を深めていくことにしたのである。

また学生は、初めての実習であるだけでなく、これまで主体的な学習体験を積んできているわけではないため、実習前ガイダンスによる十分な説明と、病院実習中・学内実習での個別指導や確認を繰り返すことにより学習を進めていく事を徹底した。

Ⅱ．研究目的

改善した基礎看護学実習の方法が、学生の看護過程習得状況および実習の満足度に効果があるのかを明らかにする。

Ⅲ．研究方法

本学衛生看護学科14年度入学生で基礎看護学実習を履修した81名（従来群）に対し、基礎看護学実習終了後の平成15年３月に、15年度入学生で基礎看護学実習を履修した71名（変更群）に対し、同じく基礎看護学実習終了後平成16年３月のAGHの時間を利用して同じ質問紙を用いて調査を実施した。従来群と変更群では看護過程学内演習の展開数および、レポート評価においては差がなかった。

調査内容は、患者との関係成立、アセスメント、問題把握、考察評価、および実習の満足度等の項目で、これらを５段階評価し、「大変できた」５点から「できなかった」１点の得点に換算した。両群について統計ソフトSPSSを使用し、t検定により有意性を検出した。変更群に対しては、准看護師課程との実習の学びの違いも自記入方式で調査した。

学生への倫理的配慮として、本研究の趣旨とプライバシーの保障、成績には関係ないこと等を口頭および紙面上で説明し、アンケートの回収をもって承諾とした。

また、基礎看護学実習に関わった教員11名に対しても平成16年３月に従来の基礎看護学実習との違いや変更後の効果にいてアンケート調査を行った。趣旨を説明し、了解を得て無記名で実施した。

Ⅳ．結果

アンケートの回収率は、両群の学生、教員とも100％であった。

学生に対する調査では、表２に示すように従来群に比べ変更群の方が、看護過程の評価項目の全てが有意に高くなった。従来群では平均点が３点以下と低かった「情報収集」「看護上の問題の把握」「優先度をつけた計画立案」「実施の評価考察」についても、全て3.5以上の平均値になった。

表２．看護過程の自己評価平均点の変化

項　　目	従来群（n＝81） Mean（SD）	変更群（n＝71） Mean（SD）	p 値 **p＜0.01
受け持ち患者との良い関係が成立できる	3.59（0.83）	3.96（0.68）	**
受け持ち患者を取り巻く生活環境が理解できる	3.47（0.72）	3.80（0.60）	**
看護するために必要な観察ができる(情報収集)	2.96（0.79）	3.52（0.60）	**
患者のニーズや看護上の問題が分かる	2.89（0.63）	3.69（0.55）	**
患者に適した生活援助を、優先度をつけて立案できる	2.83（0.72）	3.63（0.68）	**
行った看護を、反応を確認しながら評価考察できる	2.94（0.64）	3.62（0.64）	**

基礎看護学実習に対する満足度では、図１に示すように従来群では、「やや不満」「不満」を併せて４割を占めていたが、変更群では大幅に減少している。「どちらともいえない」「不満」と答えた者の内容をみてみると、従来群では、「時間が短く不十分であった」58名中26名と圧倒的に多く、次いで、「記録が多くかけない」13名、「学習不足」10名、「関わりがうまくできなかった」４名となっている。それに対して変更群では意見にばらつきがあり、「患者家族とのかかわり」「記録がうまくかけない」が５名、「時間の活用がうまくいかなかった」３名である。その他の意見としては、「グループメンバー」「もっとできることがあったはず」「病院では環境になれないまま終わった」などがあった。

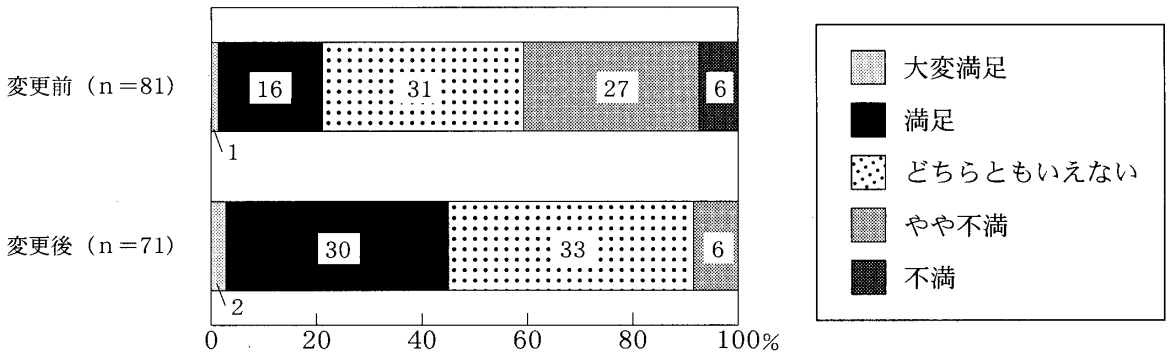

図１．基礎看護学実習の満足度

また、高校や准看護師課程での実習との学びの違いを変更群に自記入で尋ねたところ、「全体像を把握してその対象にあったケアを行う必要性を学んだ」「患者にとっての優先度を考える必要性を学んだ」「この援助がなぜ必要なのかを考えられた」「プロセスレコードや記録からも責任の重さを感じた」「自分の接し方を振り返る大切さを学んだ」などが書かれていた。

次に、基礎看護学実習にかかわった教員11名に対して、変更したことについての意見を聞いた。図2に示すように学内での1週間で面接指導をしたことにより、全体像や計画を深めることができていたという意見が多かった。また、病棟においての観察が情報の記録を埋めるための観察ではなく、患者を観ることができていたという意見も7名いた。反対に悪かった点では、「患者を観ながらの展開指導ではなかったので、観察点が抜けており不足な情報を取り直すことができなかった。」という意見が8名あった。他に、「学内での1週間が学生によっては緊張感がないものもいた。」という意見もあった。

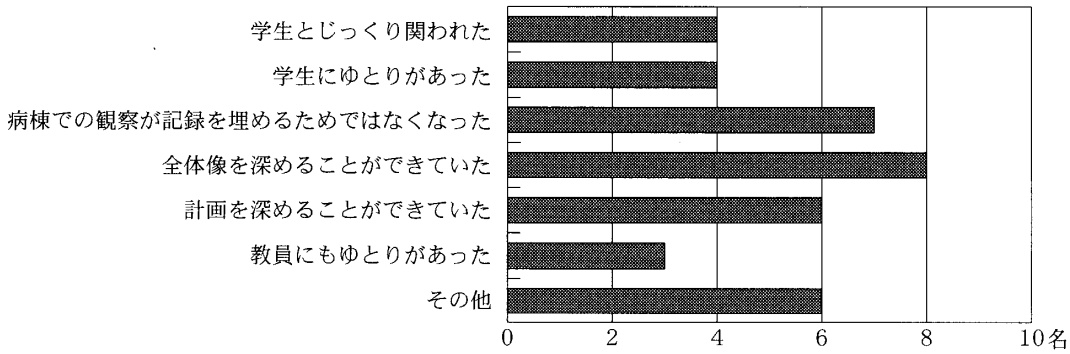

図2．変更した基礎看護学実習の良かった点（n＝11）

次いで、実習方法を変更したことによる看護過程の到達度について尋ねた。観察・情報収集については、「今年度のほうが良い」が7名、「変わらない」3名、「昨年度のほうが良い」1名であった。しかし、全体像の把握、看護上の問題把握、及び計画立案に関しては、11名全員が「今年度のほうが良い」と答えていた。昨年度と比較してどちらのほうが実習効果があがるかという質問に対しては、「今年度のほうが良い」7名、「良い部分も悪い部分もあるのでどちらともいえない」が4名であった。

実習期間中の記録について質問をしたところ、記録量は、7名が「ちょうど良い」、4名が「どちらかといえば多い」であった。記録の内容については、「学生によってはどの場面を振り返りたいか不明なものもあり、プロセスレコードを毎日書かせる必要性があるのか」や、「フローチャートが活用できていない」また、「行動記録やプロセスレコードを毎日書かせることにより、学生の思考も分かり指導しやすかった」等の意見があった。

V．考察

1．学生の看護過程に対する学び

今回の基礎看護学実習方法の改善は、果たして学生の人間理解と看護過程の展開の理解が深められたのかを検証した。学生へのアンケートの結果からも分かるように、従来群に比べ変更群は看護過程の評価項目が有意に高くなった。准看護師過程との実習の学びの違いについても、「全体像を把握することや優先度を考えて看護することの必要性が学べた」と答えていた。また教員の評価も、全体像や計画を深めることができ、患者を観ることができていたという意見が多かった。従来は、病院実習中から看護

過程の展開を中心に行ってきたために、初めて実際の患者の看護過程を展開する学生はどうしても記録用紙を埋めるための実習となってしまい、結果として時間が足らずに後日に指導を行ってもすべてが理解不十分であった。変更により、病院での１週間はケアを通して対象を観て、その自分の行動や体験を行動記録に残すことにより、患者の反応や、疑問、自分の困惑、患者にどのようになってもらいたいかなどを考えていくことができたと思われる。そしてそれに教員が直接応えていくことにより、疑問が解決できこの患者に必要なことは何なのかを深めていくことができたのではないだろうか。プロセスレコードも同様で、学生は体験した場面を再構成することにより、自己を振り返り、患者とのかかわりを反省したり検討したりと、患者を知ろうという動機付けにつながっていたのではないか。その上で、学内で教員の指導を受けながら看護過程の展開を紙面上でさせたことにより、看護上の問題の明確化を促進することができたのではないかと考える。事前学習したことが臨地で体験でき，さらに学内で深められ、できたという気持ちが自信となったために満足感が高まったのではないだろうか。またそのことが、学生の満足度の差となって現れたと思われる。満足出来なかった理由を見ても、従来群は「時間が足らない」や「記録が多く書けない」という意見が多かったが、変更群では実習時間や記録量を変更していないにもかかわらず、そのような意見はなかった。教員へのアンケートでも、「学生や教員にゆとりがあった。」と答えられていた。有松ら[1]は、実習における学生の心理を、「実習は学生にとっては想像を越える教育環境である。中略。看護学を学び始めた者にとっては理解しがたい部分も多く、予測不能な事態に十分に対応できず混乱を生じやすい。」と述べている。したがって、短期間で実施される病院での基礎看護学実習では、適切な助言や指導を受けることによって患者との関係を学び、学生が日々立てた課題を達成していくような現在の方法が、学生の不安感を軽減でき、人間としての患者を見ていくことができるのではないかと考えている。

また、学生が満足できた理由にも、できなかった理由にも、「看護が少し見えてきた。もっと患者のために何かできたはずだと思うと残念だ。」というような意見が見られた。これは、学内での１週間の教員主導によるカンファレンスや面接指導において、学生自身の感じたことや考えたことを尊重しそれを意識的に振り返ることを行えたことが、学生の看護としての意味付けを深めて行けたのではないかと思われる。花子ら[2]は「できたという達成感がもてたことは有意に実習意欲が高くなった」と述べられているが、今回の実習でも、学内での１週間の振り返りを充実化することで、看護の対象を具体的にイメージすることができ、学生の学びや満足度の評価は高まり看護に対する興味が出てきたと示唆される。これらのことから今回の方法は教育的な効果があったと考える。

２．今後の課題

教員へのアンケートの結果、観察・情報収集については様々な意見があった。変更した実習方法では、日々看護の方向性の助言をしながら学生が目的を持った情報収集ができるようにと心がけてはいたものの、情報収集記録用紙を用いての方法ではなかったため結果的には学内で振り返りを行った際、情報が不充分であった。内藤ら[3]は、基礎看護学実習２～３日目に受け持ち患者の状態や看護について学生による説明（プレゼンテーション）を実施し、看護過程とくに情報収集の段階で効果があったと述べられている。このように、１週間を通して病院実習をするのではなく、実習３日目に学生自身が調べたり考

えたりしてきた受け持ち患者の状態や看護を、情報収集の用紙に照らし合わせて発表させたり、事例カンファレンスを行うなどし、それについて教員から助言指導をするなどの工夫をしたほうが、学生は何がなぜ看護として必要な情報なのかを理解でき、目的をもった情報収集ができるのではないだろうか。１週間という短い病院実習期間を有効に使うためにも、学生自身が学習内容の意味付けを明確化できるように、実習３～４日目に、指導者や教員を交えたカンファレンスなどの働きかけを行っていく必要性を痛感した。今後の課題として検討していきたい。

毎日のプロセスレコードの必要性については、教員の意見としては賛否両論ではあるが、学生は、「責任」や「振り返ることの大切さ」を学んだという意見があった。人間と人間とのかかわりや看護師としての自分のかかわりを振り返ることは、人間関係を学ぶ上でも、又看護師としての言動や行動の責任を考える上でも重要であると思われ、今後も続けていきたいと考えている。

Ⅴ．結語

平成15年度からの基礎看護学実習の変更は、学生の看護過程展開への理解と実習に対する満足度を深めることができていた。しかし、病院での１週間で目的を持った意図的な情報収集ができるような方法の検討が課題として残されている。今回の評価を基に２年課程の本学の学生が、人間とは何か、看護とは何かを深く学習していけるよう、基礎看護実習前ガイダンスや病院実習中の事例カンファレンスおよび情報収集用紙の充実化を図るなど、今後も更なる実習方法の検討を継続していきたい。

文献

1）有松　操他：看護対象論実習における学生の心理－実習記録の分析から－，鹿児島純心女子大学看護学部紀要，５，43～53，2000.

2）花子紀子他：基礎看護学実習が今後の学習意欲に与える影響―実習の達成度と体験の意味付けの有無で実習意欲を分析して－，第34回日本看護学会抄録集－看護教育－，P23，2003.

3）内藤さゆり他：学生の受け持ち対象の状態のプレゼンテーションの看護過程に対する効果―平成13年度生と14年度生の基礎看護学実習評価表の比較分析より－，第35回日本看護学会抄録集－看護教育－，Ｐ９，2004.

4）雀部萌美他：臨地実習における効果的な実習指導方法の検討－学生のための事例カンファレンスを設定して－，京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，11，79～84，2001.

5）安酸史子：実習教育における教育型学習方法としての経験型実習教育，第35回日本看護協会看護教育特別講演シンポジウム抄録集，１～３，2004.